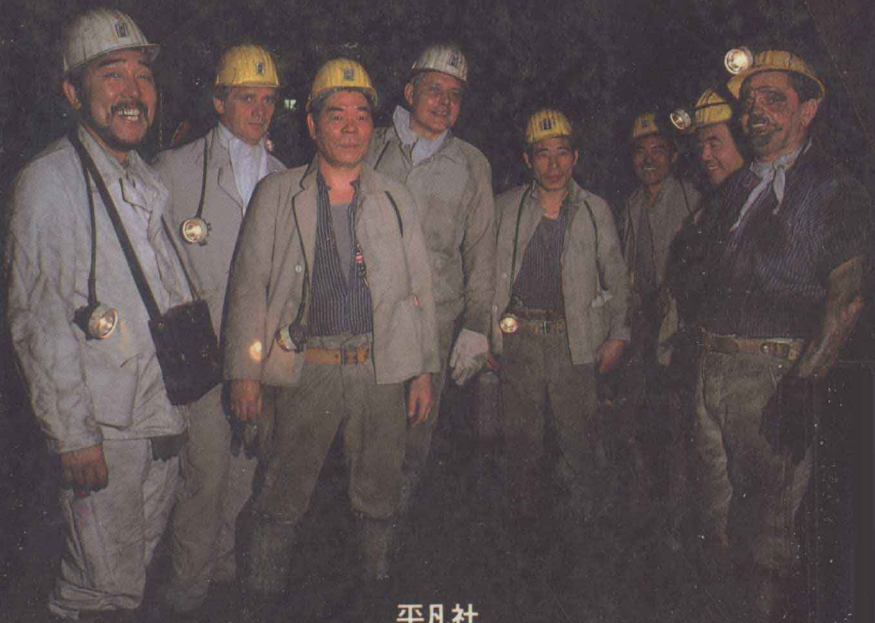


おは日本の 炭鉱

ドイツ・カナダ
の日本人
炭鉱マン

写真・文 栗原達男



平凡社

さらば 日本の炭鉱

ドイツ・カナダの日本人炭鉱マン

写真・文
栗原達男

さらば日本の炭鉱

発行———1987年3月16日 初版第1刷

定価———1600円

著者———栗原達男

発行者———下中直也

発行所———株式会社平凡社

〒102 東京都千代田区三番町5

電話 03-265-0470(編集)

03-265-0455(営業)

振替 東京8-29639

企画・編集———株式会社平凡社教育産業センター

印刷———株式会社東京印書館

製本———和田製本工業株式会社

©Tatsuya Kurihara 1987 Printed in Japan

ISBN4-582-82357-2

不良本は直接小社読者サービス係までお送り下さい。(送料小社負担)

さらば日本の炭鉱 目次

1 日本——高島砒の閉山と炭鉱マンたち

回想の高島砒 22

切羽にサヨナラいつてきた 28

炭鉱一本でやってきたばい 35

“拝啓総理大臣さま” 46

相次ぐ炭鉱事故 52

2 西ドイツ——ライン河畔の九州男児

第一の故郷となったドイツ 64

「グリュック・アウフ」——イッカン砒 69

『かあさんの歌』 76

西ドイツ派遣のいきさつ 79

「グリュック・アウフ」——ローベルグ砒 89

死んだらラインに灰をまいてくれ
99

センチメンタル・ジャーニー
112

「ベートリ・ハイル」
122

3 カナダ——ロッキーマウンテンに生きる道産子

九月の吹雪
138

カナダに賭けてみよう
143

スケールの大きなカナダの生活
152

働きやすいがレイオフが怖い
162

二つの国の間で
170

地質学者のユウコさん
181

炭鉱はどこへ行く？
192

あとがき
201

1
日本――

高島砒の閉山と炭鉱マンたち

回想の高島砦

北風が吹く朝、羽田から長崎・大村空港行きのジャンボに飛び乗った。日本最古の炭鉱、三菱高島砦の閉山を撮るためである。

私のような報道カメラマンにとって、国内でも外国でも、一度行つたところに二度、三度と足を運ぶことは常にある。「高島も二度目になるなア」と思ったが、前に行つたのが何年前かがハッキリしない。炭鉱を撮り始めたのは――、一九六五年六月一日。これは確かだ。筑豊山野鉱で起きたガス爆発。あの時も羽田から福岡空港へと飛んだ。あれからもう二十二年にもなるのか……。

当時私は朝日新聞東京本社出版写真部のカメラマンだった。山野鉱のガス爆発は、二三七人もの死者を出す戦後二番目の大惨事になったが、その二年前の一九六三年、三井三池三川砦で起きた死者四五八人を出す戦後最大の炭じん爆発事故現場には行っていない。

六〇年安保の翌年に学校を終えた私は、既にカメラマンになつていたのに三池に行かなかつた。新聞社のカメラマンであれば、現場に行く行かぬはデスクの指図次第。自分で決められないのだから、その時他の仕事をしていたか、指名にもれたかのどちらかであるが、「三井三池」という四字に慙愧ざんきに近いものを感じていたことは確かだ。

私が大学に入る前に「砂川」があった。だが大学後半は「安保」だった。学校も休校になり、連日のデモ。「デモくらしいだ」などと笑ったりしたが、一九六〇年を戦後政治最大のターニングポイントとした場合、一二〇〇名の指名解雇に端を発した「三井三池」二〇〇日に及ぶ大ストライキの方も、「安保闘争」に優るとも劣らない大事なものの——その認識が欠けていた。

新聞社に入り、記者と出張したり、夜の有楽町を飲み歩いたりしているうちに、三井三池の重さがジワ—ツとのしかかってきたのだらう。それが慙愧の気持ちとなっていた。

——思えば大学の四年間も、新聞社生活の六年間も、政治の季節だったなア……。

政治のこと、世の中の諸々のことを考えれば、当然、学生って何なんだろう、カメラマンになれなかったで、写真って一体何なんだろう、マスコミとは？ など次々に疑問が湧いてくる。

新聞社のカメラマンでも、出版写真部というセクションは、新聞の写真でなく、週刊誌やグラフィックなど刊行物の写真が分野なので、日本中が常に守備範囲である。大事故、大事件の時は新聞の写真部と合同で取材することもあるが、通常は記者と二人三脚でテーマを追う。

「ねえ、栗さんはどう思う」

と聞く姿勢の記者が多かった。

そうした心やさしく正義感の強い人たちに、知らず知らずに影響を受けた。カメラマンの方も、た

だ撮ればいい、といった安直な考えではいられない。記者と充分話し合えるだけの認識が要求されていた。

「我々の仕事は愛社精神といったセクシヨナリズムより、愛職精神の方こそ大事なハズ」と、ライバルである毎日新聞社出版写真部と時折合同ミーティングを持ちたりした。

ミーティングといっても酒宴であるが、写真の話が深夜まで続いた。おそらくもう二度とこういう会は生まれないだろう……。

そんな二十年以上も前のことをつらつら考えているうちに、ジャンボは大村空港に着いた。

長崎港から高島へ行く連絡船は伊王島に寄る。デッキは寒いので客室に入り、前にこの連絡船に乗ったのがいつだったかを指折り数えてみた。

一一年前の昭和五〇年の秋、私は「いま」と同じように長崎港から伊王島經由高島行きの連絡船に乗った。長崎に行く機会があったらぜひ伊王島へ——という気持ちこそうさせたのだが、山田洋次監督の『家族』を見て以来、いつか必ずこの島へ行ってみたいと思っていた。

昭和四五年、大阪万博の年。九州の斜陽になった炭鉱の島から、日本列島を縦断して北海道の開拓地へ移住する一家の物語だ。映画あるいはテレビで見た人も多いハズだ。

炭鉱離職者は井川比佐志、妻は倍賞千恵子。二人の子供と笠智衆のおじいちゃんをかかえ、道中ま

ず徳山と思われる石油コンビナートで働く弟の家に寄るが、身の置きどころもない。おじいちゃんをあずけることも断念し、再び山陽本線に乗り大阪へ。無理をして万博を見た過労から、上野に着くと幼児が発熱、急死する。やっとのことでたどり着いた根釧原野の開拓地。こんどはおじいちゃんが亡くなる。

何とも悲しい物語だったが、最後を根釧原野の春というハッピーエンドで締めたせいかな、たくさん賞に輝いた。

東京オリンピック、高速道路、新幹線、大阪万博と、高度成長の道標が建つ陰で、故郷を失っていく人びとの姿は、『家族』のあとに作られた『故郷』にも共通した山田監督のテーマだ。(余談だが、私は瀬戸の石切り船の夫婦を描いたこの作品の方が好きで、完成度からいっても上だと思ったが、ハッピーエンドでないせいか賞には恵まれず、それが印象深かった)

良い映画に出会ったまもなくその舞台に行ってみた。ヘキは昔から。木下恵介監督の『野菊の如き君なりき』を見て、ロケ地の千曲河畔を何日も歩き、原作の舞台となった松戸市矢切の隣の国府台に下宿したのは高2の時。

そのヘキが伊王島へと向かわせたのだが、伊王島に上陸してみると、住居跡の空き地、そして空き家が目立つ過疎の島だった。

「炭鉱(日鉄伊王島鉱)があった時は七〇〇〇人も住んでいたのが、いまは二〇〇〇人しかおらん

ばい」

と島人は言う。教会の大きさはかりが目立つ島。

夕刻までには長崎へ戻らなくてはならないので、次の船で高島へ渡った。

なにぶん急な寄り道なので、高島については予備知識ゼロであった。棧橋から大きな立坑^{たてい}のヤグラが見えたので、風呂へ行く男の人に声をかけると、このヤグラは二子^{ふたご}立坑^{たてい}といって、本坑は一〇分ほど歩いたところにあると教えてくれた。

「この炭鉱はあと三〇年は大丈夫ばい」

二時間あまりで島を一周したが、この小さな島は何と日本で石炭が最初に発見された島であった（二七〇年、宝永七年に平戸の五平太により発見）。慶応四年にはグラバー邸でお馴染みのスコットランド人グラバーが、佐賀藩と共同で経営に乗り出し、島に別邸を作って長崎の本邸との間に電話線を引いた。これも日本で最初の私設電話だったという。

期待感もなしにあがった島が歴史的な島であることは「大発見」だったが、もっと興味があったのは、沖に見える隣の島、「軍艦島」こと端島に、高島の人がちよいちよい釣りに行ったりしている、ということだった（三菱端島砒は昭和四九年閉山し、無人島と化した）。



“緑なき島” 軍艦島こと端島の現在。高層アパート群は大正5年～7年に建てられ、わが国最古の鉄筋コンクリート高層住宅という。

切羽にサヨナラいつてきた

そんな聞き込みから一一年、スミが充分あるからまだ三〇年は大丈夫、と炭鉱マンが胸を張っていたのに、日本最古の炭鉱はそれより二〇年も早く閉山しようとしている。

長崎発の連絡船 降りた時から

高島港は 風の中

島へ帰る人の群は 誰も無口で

海鳴りだけを 聞いている

私もひとり連絡船を降り……

などと呟く。

ポケットの中には大事なメモがあつた。昨夜遅く帰った私に、

「花井さんからの伝言です」

と妻が渡してくれたもの。

「高島に第四陣の人が二人います。河原実男^{じつみ}さんと鬼丸^{おにまる}春雄さんです」

とある。(花井さんは北炭から西ドイツに留学中、炭鉱派遣団の連絡員をした。現在は新エネルギー総合開発機構に勤務)

棧橋にスリーゲイヤ印の三菱専用船があった。その彼方に一一年前と同じ姿で二子立坑の鉄のヤグラがシルエツトで浮かぶ。

それを撮っている間に日は暮れ、寒風の中を宿さがしする。町の福祉会館はマスコミの人間に占拠されて、二階の大広間はまるで修学旅行の宿のよう。違うのはテレビや新聞社のスタッフが、それぞれ車座になって酒盛りをしていることだろう。その隅っこに何とか泊めてもらえることになり、ボストンバッグを布団の上に置き、河原実男さんのアパートへ行く。

第二部の西ドイツ篇で詳しく触れることになるが、日本と西ドイツの政府間協定で、一九五七年から六二年の五年間に四三六人の日本人炭鉱マンが、三年間の研修で西ドイツに渡った。河原さんの第四陣というのは、一九六一年に渡った「西独炭鉱派遣団第四陣」のことである。

資格は二一歳から三〇歳までの独身炭鉱マンで、北は北海道から南は九州まで、選り抜かれた人たちであった。

河原実男さん(四六歳)は生粋の高島っ子。昭和一五年にこの島に生まれ、高校を終えると父の年一さんと同じ炭鉱マンになった。

「ドイツに行ったのは二一歳の時です。昭和三六年、高島を離れた時はヤマも活気があったとす

が、三九年に帰国したら、すっかり下火になっていて、友だちが何人も炭鉱をやめおったですよ。たった三年でこんなに変わるものかなア、とビックリしたとです」

アパート二階の部屋は整然としていた。というのも本鉱員の河原さんは転勤の辞令が出たら一週間以内に赴任しなければならず、食器棚の中も梱包を終えて、ガランドウだった。

「北海道へ行けばドイツ時代の仲間もおるけど、南大夕張もあと二年で閉山になるというとですよ。希望は九州圏内というたですが、どこへ飛ばされるか分からんとですよ。関連会社はセメントが多いけど、大体へんぴなところですよ」

道子夫人は筑豊は飯塚の育ちである。

「去年、二〇年ぶりに飯塚へ行つて懐かしい同級生たちとも会えたし、どこへ転勤になつても思ひ残すことはないですよ」

二人の息子、映児さん（一九歳）、紅児さん（一八歳）は、「オヤジ、もう炭鉱には入らんでいい」と、長崎市の下宿先から電話をかけてくる。心配なのだろう、「シバレルつてどういふことや」

「人間が凍つてしまうことや」と応答したりする。

「私はこの島と、ドイツのカストロップ・ラクセル町しか知らんとね。中学二年の時、台風で大波が西海岸から東へ抜けていったとですよ」

石炭が海に流出し、道路は寸断された。河原さんにはそんな思い出がたくさんある。

河原さんの父年一さんは写真が大好きで、炭鉱を定年退職するとD.P.店を開いた。島で一軒の河原カメラ店である。実男さんは西ドイツで給料がたまると、八〇〇ミリの望遠レンズを買って父に送った。当時、ドイツはすべてにおいて先進国だった。

「私もライカを買ったのですが、オヤジと違い、写真はダメ。でも西ドイツでの三年間にヨーロッパを殆ど旅行したとですよ。オヤジが、見聞を広めてこい、日本に金を送る必要はない、言うてくれたんで全部使ったとです」

そう話している時電話が鳴った。第四陣仲間が心配してかけてきたのだった。

翌日の早朝、三番方の出坑と同時に三菱高島砒は閉山となった。

『高島記』によれば、宝永七年（一七一〇）肥前平戸の領民「五平太」なる者が、広磯といわれるこの地で石炭を発見し、炭穴を開き採掘を行った。その後深掘藩により鍛冶製塩用炭として中国四国方面に輸送販売し、文化年間には佐賀藩営に移った。さらに慶応四年に佐賀藩と英国人グラバーとの共同経営で、本格的な日本最初の近代炭坑北溪井坑が開さくされ、明治七年に一たん官営となり、同年後藤象次郎が払下げを受け、明治一四年岩崎弥太郎が買収して三菱の経営に移り、現在に至った。